

五 桜山・名城キャンパスから東山へ — 法学部・経済学部

◆名古屋高等商業学校（桜山キャンパス）

文系地区のうち一番東側、四谷通に近いところにあるのが法学部と経済学部です。

経済学部は、名古屋高等商業学校（名高商）を前身としています。高等商業学校は一八八四（明治一七）年の東京高等商業学校を皮切りに、一九〇〇年代に神戸・山口・長崎・小樽に官立が四つ、大阪に市立が一つ創設されましたが、その後一時期新設は行われませんでした。しかし第一次世界大戦を契機として諸産業が成長し、優れた企業経営者の養成が必要という要請から、新たな高等商業学校の創設を望む声が、都市部ではおこっていました。そこで一九二〇（大正九）年一月名古屋に、一〇年ぶりに第六番目の官立高等商業学校が創設されたのです（翌一九二一（大正一〇）年五月より実際の授業を開始）。

名高商の校地は愛知郡呼続村大字呼続字川澄（現瑞穂区瑞穂町川澄）にありました（桜山キャンパス）。校地候補の決定は一九一八（大正七）年六月、その後整地・基礎工事が行われ、一九二〇（大正九）年四月には、すでに文部省に引き渡されていました。しかし校舎建設は遅れ、



【図18】1933年頃の名古屋高等商業学校（中日新聞社提供）

授業開始の一九二一（大正一〇）年五月の時点でも、本館と寄宿舎が出来ていた程度で、授業のかたわらに建設工事が行われていたという状況でした。しかも、数度の暴風雨に見舞われたため工事は滞り、校舎完成は翌年までかかりました【図18】。

◆名古屋経済専門学校

戦時下になると総力戦体制のための科
学技術の振興が重要視され、名高商は一
九四四（昭和一九）年三月に名古屋工業
経営専門学校と名称を変えるときに、
授業内容も工業重視の内容に変わって
きました。なお、すでに在学している名
高商生が卒業するまでの移行措置として、
名古屋経済専門学校（名経専）も併置さ

れました。空襲の被害は全校舎の一〇%が焼失したにとどまりましたが、武道場・雨天体操場や生徒控室は三菱航空機の分工場となっており、これによる授業の不自由は敗戦後まで続いたようです。

名古屋工業経営専門学校は敗戦の翌一九四六（昭和二一）年三月に廃校となります。実質二年間しか存在しませんでした。ところが名高商廃止の移行措置として残されていた名経専の方がこの年より新入学者を募集し、また経営科を新設して名古屋工業経営専門学校の学生を継続して受け入れていくことになりました。すなわちそれまでの本科を経済科と経営科に分け、前者に名高商の課程を復活させ、後者に名古屋工業経営専門学校の課程を残そうとするものであり、全体として戦時下の工業色を著しく減少させる結果となりました。

◆法経学部から法学部・経済学部へ

一方名古屋大学では前述したように、一九四六（昭和二一）年より文系三学部の新設要求を文部省に対して行っていました。これについて名経専側では、この名古屋大学の構想に合流するか、これとは別に単科大学に昇格するかという議論がありました。結局は名古屋大学に合流して、発展的に解消することになりました。そしてこれも前述しましたが、三学部要求は結局文学部・法経学部の二学部として認められ、一九四八（昭和二三）年九月に法経学部が、文学

部とともに設置されました。

発足した法経学部は、初めからキャンパスが二つに分かれていました。法律・政治学科は、文・教育学部と同じく、名城キャンパス内におかれました。一方経済・経営学科は旧名経専の桜山キャンパスをそのまま引き継いで利用していました。そして一年半後の一九五〇（昭和二五）年三月に、法学部と経済学部の分離が認められ、その結果、文・教育・法学部が名城キャンパスに、経済学部が桜山キャンパスという形になったのです。

◆法学部・経済学部の東山キャンパス移転

文系地区の土地取得の経緯については、先にふれておきました。しかしその文系地区への移転は、法学部と経済学部の方が最初でした。そしてここでもやはり、先と同じく建築交換移転の方法が採られていました。すなわち経済学部のある桜山キャンパスの土地・建物等を名古屋市中に譲渡するかわりに、名古屋市の負担で東山キャンパスに経済学部・法学部の鉄筋建築を（ほかに学生寮と学生会館の一部も）建設してもらうもので、これは一九五七（昭和三二）年七月に、名古屋市との間で決められました。これに基づいて法学部・経済学部の建物が東山に新築され、一九五九（昭和三四）年三月には経済学部が、同年七月には法学部が、それぞれの旧キャンパスからの移転を完了しています。

なお、名古屋市に譲渡された桜山キャンパスは、現在名古屋市立大学医学部およびその附属病院となっています。ここにも、旧名経専のシンボルであった「其湛の塔」が残されており、その名残りを伝えていきます。また現在の名古屋大学の学生寮である「嚶鳴寮」の名も、名高商の学寮名を受け継いだものです。

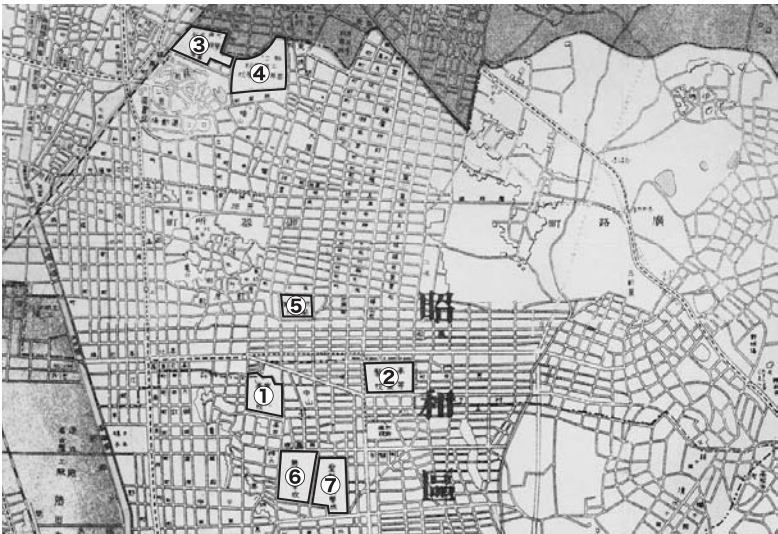
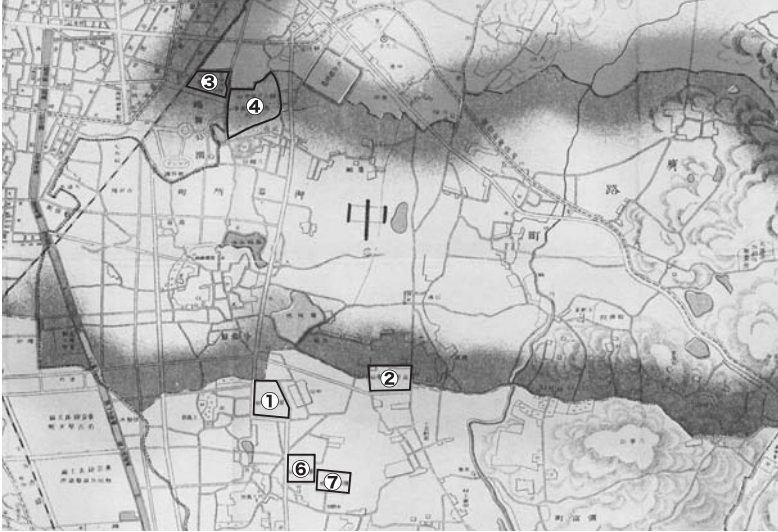
別に現在、金山―名古屋大学間の市バスは、途中名古屋市立大学医学部のある桜山と、名古屋市立大学経済学部・人文社会学部のある滝子を通っています。どちらも旧名大キャンパスがあったところです。この系統の市バスは、金山に近い高蔵キャンパスを含め、この時期分散していた名古屋大学のキャンパスを繋ぐための路線であったという歴史を持っています。

◆市街地拡大と大学キャンパス

大学キャンパスの建設場所は、都市市街地の拡大と密接な関係を持っています。二〇世紀に入り日露戦争から第一次世界大戦にかけて、産業が急速に発達すると、東京・大阪をはじめとして、都市市街地が急速に拡大し始めます。名古屋も同様で、それまでは中央線と東海道線を結ぶラインより西側が市街地でしたが、この時期より以降、このラインより東へと徐々に市街地が拡大していきます。学校のキャンパスはそれなりの広い土地を必要とします。この時期新しく設置された学校が、旧市街地でそのような広い土地を購入することは困難でした。そのた

め便利な市街地に隣接しつつも、まだ市街地化はされていない、これから市街地化されようとする都市周縁部に、どうしてもキャンパスを建設せざるを得なかったようです。このため明治末から昭和初期にかけて市街地となった、当時の名古屋周縁部Ⅱ新興市街地に、鶴舞・瑞穂・桜山のキャンパスいづれもが存在する結果になったのです。ちなみにこの付近には、名古屋高等工業学校（一九〇五（明治三八）年創設）・愛知県立工業学校（一九〇五（明治三八）年移転、以上二校あわせて現名古屋工業大学）・名古屋商業学校（一九二八（昭和三）年移転、現向陽高校敷地）・第五中学校（一九〇七（明治四〇）年創設、前述の熱田中学校の前身、現瑞陵高校、場所は愛知県立大学前キャンパス跡地）・愛知県立商業高校（一九一九（大正八）年創設、場所は現瑞陵高校）などがあり、いずれもこの時期に建てられた学校です【図19】。

なお、この傾向はその後も同じで、たとえば敗戦後から高度成長期までに市街地化された本山から八事周辺までの地域には、名古屋大学東山キャンパス・南山大学・中京大学・名城大学が先行してキャンパスをおいており、さらに昭和四〇年前後より以降に郊外へ移転した愛知学院大学・名古屋商科大学・中部大学がある日進市・春日井市東部は、その後急速な住宅地化が進んでいます。大学ができる住宅地化ということになりましょうか。



【図 19】(上) 1921 年と (下) 1937 年の名古屋市東南部図

市街地が急速に拡大したことがわかります。①第八高等学校②名古屋高等商業学校③鶴舞キャンパス④名古屋高等工業学校・愛知県立工業学校⑤名古屋商業学校⑥第五中学校⑦愛知県立商業学校